これからの林業と林地肥培

静岡の狩野さんの生活と意見

河見　泰成

折角おいでても データーや文献がある訳でなし…

“静岡に来られるというが，わたしは一介の林業経営者に過ぎないのでね，ええ，そりやコンクールで農林大臣賞は頂戴しましたけど，折角おいでても　試験場や大学とちがい，試験のデーターや文献がある訳でもない。それでもおいでるというのなら，別にお断わりするつもりはありませんけど…。”

去る6月中旬のある日。静岡市西草深町29―5に在住される狩野安彦さんから，こういう電話がかかってきた。

狩野さんといえば，本誌6月号でご存知のことと思うが，日本林地肥培協会主催の第11回（45年度）全国林地肥培コンクールで，栄えある農林大臣賞を授与された静岡県下の篤林家である。

筆者は，狩野さんが同市桂山大字杉ノ沢にある，その応募林分（面積＝0.7ha，樹種＝ヒノキ，植栽本数＝0.1ha当り430本，林令5年，現在本数＝2,860本，0.1ha当り409本）に，植栽後1カ月の41年5月と，下刈2カ月前の44年4月に，それぞれ“くみあい燐硝安加里新緑（16―7―8）”と“新緑(21―6―7)”を，1本当り63g（N10g）と57g（N12g）施肥されていることを知り，林地肥培に対する狩野さんの卒直なご意見を伺いたいと思い，あらかじめご都合をおききしておいた。―電話はそれに対する狩野さんの返事という訳だ。

“それでもおいでるなら”は，おそらく“おいでになってもいいですよ”ということだろうと，そこはそれ“記者気質（かたぎ）”で強気に解釈して，“それでは6月23日10時頃伺います。”と日取りもOK。

その23日，静岡駅頭でタクシーを呼び，先に狩野さんから送って戴いた略図を見せると，運転手は軽くうなずいて，次第に青空がひろがってきた午前の静岡の街を，右手に旧駿府城内を眺めながら，地図にある丸光タクシーを目印に右折し，その150mほど先をこんどは左折，更に右手に見える小路を入った左側の大きな門構えの邸宅の前で停め，“ここが狩野さんです。”と云った。

玄関左手のサロンに招じられて待つ程もなく，瀟洒なセーターを着こなした，180cmはあろうかと思われる人物が見え，“狩野です”と挨拶された。一見やせぎすではあるが，1年の3分の1は鉈（なた）を腰に山と取っ組んでいる男の，たくましい肉体のマッスが迫まってくる。

林業家としての狩野さんの人となりとその経営の方針

林業家狩野さんの人となりや，経営方針などは，筆者がくどくど書くよりも，静岡県当局が提出したコンクール関係書類に，きわめて簡潔に紹介されているので，それをご覧願おう。

『〔経歴〕連年収獲，生産期間の短縮，優良材(無節材)の生産をはかるための計画造林，林地肥培，枝打を実行している。昭和44年には森林施業計画の認定を受けている。また枝打にあっては昭和初期より40数年間実行してきた地域の先達である。父君とともに優良材生産に力を入れ，特に中間収入の増大に力をはかるよう，間伐材からも無節の柱材を生産しようとするその技術は，県の指定になった枝打展示林を通じて，県下の林業家に高く評価されている篤林家である。

〔林地肥培の地域社会への貢献度〕　昭和32年に所有山林の瘠悪な林地での植栽木の成長を促進させることを目標に，0.8haにわたって固型肥料を用いて，試験的に林地肥培を行ったのが最初である。

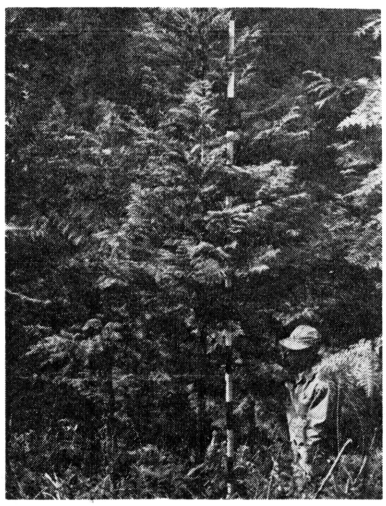
その結果，肥培林地の成長が目に見えて良くなったので，昭和37年から本格的に林地肥培に力を入れ，幼令林から20年生代林地へと，地力の劣る林地を中心に毎年肥培面積を増加させ，昭和43年からは，30年生代林地への肥培がはじまり，今では40haにわたって林地肥培が行なわれた。

その間，広く地域住民によびかけるとともに，枝打展示林を中心として行なわれる講習会の機会を利用し，地域の林業後継者や林業研究会員を対象に，下刈からはじまり，枝打，間伐と続く一連の保育作業の効果を増大させるため，肥培作業をとり入れることを推奨するなど，その普及に力を入れている。』

（但し腰の鉈は滅多にぬかない由。）

“商売柄その方面の学校出だろうとのお訊ねだが，お生憎さま，わたしは中学だけ。戦前は県庁に勤務してたこともがあるので，現在の仕事は戦後のことです。いわばおやじにきたえられたようなもんです。おやじ（敏男氏のこと）はおふくろと一緒に自分の山が目の前に見える田舎に住んでおりますが，（静岡市街から約20km）とても元気でね，80才だというのに数年前までは南アルプスに登ったり，今でも月1,2回は自分の山を見廻わるほどです…。林地肥培をすると伐期を短縮できるか？とのお訊ねですが，何しろ林業は1世紀に2回位しか果実が実らないことはご存知でしょう。わたしは，少なくともそれを実証するだけの経験を持合わせておりませんので，そうだ—と断定はできません。もっともその可能性については別ですどけね。”

“受賞の経過？これはありていに申上げますが，わたしの山は実用的には施肥はしていても，コンクールを対照とする施肥などしていないので，肥培コンクールに応募することなど，全然関心を持っておりませんでしたが県で“お前を推薦することにしたから…。”というお話がありましたので，お任かせした訳なんです。”



静岡市桂山の現場

“それに，あなたを前にして悪いけど，一体，どこの会社の肥料を使ったのか—その頃の記録や書類を調べた結果，ようやくチッソ旭さんの“くみあい燐硝安加里新緑”だということが判ったような始末で…。ちょうど自家用の茶園にまくつもりで，買ってあったのでした。この辺の経過については，表彰式後の挨拶でもハッキリ申上げておきました。そうね，燐硝安加里については良いPR記事が書けるでしょうよ。アハ…。”

この勝負完全に筆者の敗けだ。

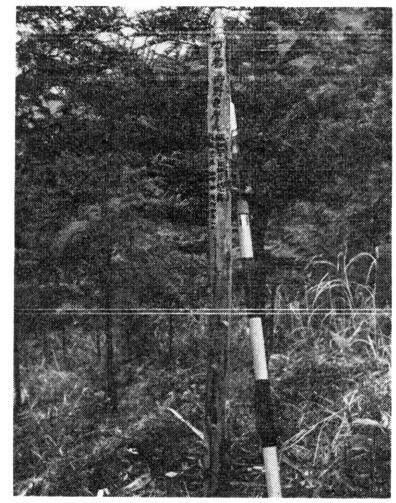
林地肥培の眼目は何か

狩野さんの考え方

“冗談はさておいて…。わたしはハッキリと林地肥培の必要性と効果を認めます。ただしそれには条件がある。林令と環境とくに土壌環境の良否，それに地形，施肥林地への肥料運搬の難易なども考える必要がある。たとえば幼令林にしても，土壌環境が中或は中以下の林地に適量の施肥をしてこそ効果はありますが，肥沃な林地の施肥は却って良くないのです。”

“一般的にみてわたしの山(阿倍川流域）では，植栽後10年くらい下刈がかかるところを，施肥した場合は，6，7年生くらいで下刈りが抜ける。それだけ下刈期間を短縮できる訳ですね。第一，肥料をやってあるかないかは，木を見さえすればすぐ判る。葉の色，新芽の量がまるでちがう。まったく正直なもんです。が，ここでよく考えなければならない。”

と，狩野さんは，とくに念をおすように，



応募林分の成育状況

“山持ちと云われ，なるほど「日本林業経営者協会」の会員の1人にはちがいないのだが，その経営規模は相撲にたとえてみればわたしなどは，やっと十両格のようなもの，横綱や大関格の大物の大規模林業経営者のように大まかな計算では，とてもこれからの林業経営はやっちゃ行けないと思う。”と云われる。

と云うことは，昨秋以降の材価の低落をまともに受けて林業界は四苦八苦。その影響は特に中，小林業者に大きい。そこで造林費をいかにして合理化するか，そこに徹底的な計算が要求される—ということを示唆されているのだ。

“幸い肥料は，特に5，6年前から割合値頃になり，成分の高い粒状の肥料が出廻るようになったし，林業用肥料として20kg袋を15kg袋に切替えるなど，メーカーさんもだいぶ気を使うようになったのでわれわれも積極的に施肥するようになりました。結論的に云って人件費が年々上るなかでは，施肥して早く下刈が抜けるようにした方が初期の造林コストが安上がりになりましょう。”

幼令期における施肥（檜について）

“幼令期の施肥は，①初期の生長を促進させ②早く林地を鬱閉し土壌の流失を防ぎ③従って下刈りの抜けるの

を早め，④賃金が高く労力の不足の現在，省力にもなるでしょう。”

つまり，幼令期における施肥は，スタートダッシュをよくし，早く林地をふさぐことにより，土壌環境の保護と，経済的にも採算がとれ，しかも省力化にも役立つのだ—と，狩野さんは指摘されている。

さて，次に，狩野さんに伺った①10〜20年生代と，②20年生代以後（間伐期）の施肥と，その効果を記してみよう。

・　10〜20年生代への施肥効果

この時期に，適量の肥料をやると，次のような効果が期待できる。

①　瘠せた土地で，葉色が淡く，その量も少なく，林内に日光がさし込んでくるような林地でも，施肥することによりグッと葉色が濃くなるし，葉の増え方がちがう。つまり新芽の量が非常に増えるので，葉が非常に密になり，したがって林内は暗くなり，2，3年後には下葉が枯れ上ってくる。（但し，肥沃な林地では施肥の必要はない。）

②　当然，葉の栄養状態が良くなり，同化作用が活発になるから，成長が良くなる。

③　この時期には施肥の直接効果だけでなく，落葉などの腐蝕を早め，土壌の微生物の繁殖しやすい土壌環境をつくる。

・　20年生以後（間伐期）への施肥効果

5，6年前からはじめたので，経験としてはそう長い訳ではない。

ここでは37，8年生で地味中以下の林地で，ha当りN 120〜130kg見当を43年，44年と2年連続して施肥した所見として，外見的には葉の色のよくなるのが，10年代の木と同じように観察される。

樹幹の皮が痩せている林地のは，古びたように見え，しかも肌がなめらかなのが，施肥して2，3年たつと，なめらかな皮の肌がザラザラ浮いたようになり，古い皮が落ちるのか，幹の肌が赤味を帯びてくる。

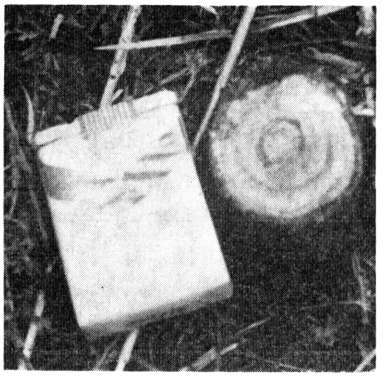
その点について狩野さんは，

“その施肥した林を来年は間伐する予定になっておりますので，根元から3，4〜6mあたりの年輪の状態を調査するつもりです。そうすれば施肥の効果がハッキリ判ると思うので，楽しみにしております。”

といわれたが，思いは筆者も同じ。できればそのときは，現場へ行って見たいものだ。

この激動期をどう切抜けるか
造林費を徹底的に合理化

“いろいろ申上げましたが，この変転きわまりない激動期にありながら，林業くらい実りがおそい企業？はありますまいね。山持ちの生活は，昔は非常に質素なものでね，わたしなど，幾らも年令のちがわない叔父の三輪車のお古をあてがわれたくらいです。いまどき，こんな事をしたら，大笑いの種になりましょうが，林業をとりまく悪条件を考えますと，心構えとしては，子供の頃に味わった質実な方針で経営に当る覚悟が必要でしょうね。それとともに，各自の経営の規模とその内容，広くはその地域にあった工夫を，いまほど必要とする時期はないでしょう。”



応募林分の断面　（施肥効果が年輪の拡大に現われている。傍らにあるのはタバコケース）

“要するに，漫然と他人と同じことをやっていたのでは仕方がない。わたしの場合，枝打を林業経営の中に組入れて良質材を生産することにより，できるだけ諸経費の昂騰を吸収し，経営内容の整備に備えたいと思います。”

話を聞いて筆者は，果樹や一般農業が，大体1年で勝負できるのとちがって，山の経営がいかにむずかしいかを，しみじみと感じたことだった。

〔まだ書きたいことはたくさんあるが，誌面の都合で残念だがここで筆をおく。ただ狩野さんの所有面積177・67ha（人工造林146ha，肥培面積40ha）を経営形態別にみると，約95haは狩野さんの個人経営，残余は狩野一族との共有林で，狩野林業株式会社が造林から伐出まで当っている。〕

〔また，狩野さんの父君狩野敏男氏が現地で元気に生活されていることは既述したが，銀行の頭取をされた祖父角太郎氏は別として，狩野家の林業の基礎は曽祖父の狩野角右衛門氏時代に形成された由である。〕

あとがき　どうも予報とちがって，ことしはなかなか暑い夏になりそうで，この夏にかける農業にとって，今夏は“もっけの幸い”になりそうです。

今月号は，やや編集方針を変えてみました。今後の農業は栽培技術の研究もさることながら，問題はむしろ“企業的経営をどうして確立するか„ということでしょう。この点で幾らかでもご参考になれば幸甚です。（K生）